

注意引き行為が多く見られた A さんへの支援

書写障害者デイサービスセンター
管理支援員 牛尾 将人

【はじめに】

書写障害者デイサービスセンター（以下、書写デイ）では重度障害者の日中活動支援をメインに1日の充実感を味わえる利用者支援を目指している。そのために、誰もがわかりやすく楽しめるよう活動内容に創意工夫を重ね、バラエティーに富んだプログラムを実施している。賑やかで元気な雰囲気や覚醒の低い利用者の刺激となったり、言語コミュニケーションが難しい利用者同士でお互いを気遣う関係性が生まれるなど、様々な場面で良好な様子が見られている。また、小グループで外出したり話し合う活動を通して、対応職員がじっくり関わる時間を持ち、利用者との信頼関係を深め利用者自身の本音を引き出せるよう意思決定支援に取り組んでいる。

一方で、書写デイの利用者の中には自傷や他害行為があったり、突発的な行動等の障害特性がある為、マンツーマン対応や常時見守りが必要な困難事例にも対応している。

本稿では、利用当初より唾飛ばし行為が頻繁であった A さんが、現在落ち着いて日中活動に参加できるように改善してきた事例について報告したい。

【事例報告】

1 A さんについて

(1) 障害状況

22 歳 男性

アンジェルマン症候群（※1）

療育手帳 A

身障手帳 2 級（脳性麻痺による両下肢機能障害）

障害支援区分 6（重度障害者支援加算対象）

主な行動障害：唾を飛ばす（口から出した唾を手で払う）、掴む（爪を立てる）、引っ張る、噛む等

(2) 生育歴

1 歳半健診 発育不全（歩行できず、発語なし）を指摘。脳性麻痺の診断を受ける

3 歳 白鳥園入園
血液検査にてアンジェルマン症候群の診断を受ける

4 歳 つくし児童園入園

6 歳 姫路養護学校（現姫路特別支援学校）入学

12 歳 姫路しらさぎ特別支援学校中学部入学

令和 2 年 3 月 姫路しらさぎ特別支援学校高等部 卒業

同年 4 月 生活介護（書写デイ / 月・火・金 B 事業所 / 水・木）利用開始

(3) A さんの特徴

- ・発語なし（発声はある）、言葉の理解はできる。
- ・運動面では歩行が不安定で、歩行時は両手で支える介助が必要。
- ・てんかん発作があるが、服薬でコントロールできている。
- ・楽しい気持ちになると興奮しすぎてしま

う傾向あり。

・人の気を引くために唾飛ばし行為がある。

Aさんが高校2年生の時に、風邪気味でくしゃみが出てしぶきが飛んだ時に、母がびっくりして大きめのリアクションをとったことがきっかけとの家族からの情報あり。唾を飛ばすことで人が反応し、それが楽しいと感じ、関わってもらえると誤った理解をしたと思われる。

(4) 書写デイ利用までの経緯

Aさんは卒業までに何か所も地域の事業所で体験実習を行ったが、頻繁に唾飛ばしがあり、周囲の人を強い力で掴み、ひっかき傷をつけてしまうこともあったことから、卒業後の進路はなかなか決まらなかった。書写デイでは高等部1年のふぁ～すと・すてっぷ(※2)と高等部3年の体験実習でAさんを受け入れ、ある程度の障害特性を把握していたこともあり、卒業後の利用が決定した。

2 Aさんへの対応、支援について

(1) 利用開始当初の様子と対応

Aさんは利用当初は緊張気味の表情で周りの動きをよく見つめ、時折横に付いている職員の体や顔を軽く触る感じでどのような反応が返ってくるのか確認していた。職員も様子を伺っていたところ、数日後には横に付いている職員に唾を飛ばしたり、爪を立てて掴む行為が出てきた。このことに対して厳しい口調で注意を行うが、聞き入れるよりも笑顔で反応を楽しんでいるような様子であった。また、離れている職員が行為を確認し反応すると、その職員にまで唾飛ばしが及ぶようになった。唾飛ばしは、自分の手を口元に持っていき、唾を手に乗せて飛ばすため、50cmから100cmは飛んでいた。

この時期は新型コロナウイルスの感染が広がり始めた頃であり、感染対策の上でも大きな問題であった。そのためマンツーマン対応

とし、家族に「安心安全に関する特別対応についての同意書」(※3)で説明した上で唾飛ばしや手が伸びる行為に対し、本人の手を押さえる行動抑制を行うこととした。特別支援学校担当教員からの引き継ぎとして学校では椅子に座っている時は足(太もも)の下に手を入れ、首にはタオルをかけて、できるだけ唾を吐いたり飛ばす行為を制限していたとの情報を得ていた。

そこで、書写デイでは職員が本人の横や後ろに付き、手を口に持っていきそうになった時に、本人の手を押さえて制止し、言葉で注意を行った。しかし注意をされるのも関わりの楽しみとなっている様子だった。本人の問題行動は唾飛ばし以外にも近くの人や物に手を伸ばし、人を掴んだり物を投げる行為がある。また、送迎車で運転手や添乗者に手を伸ばしたり唾飛ばしがあった。さらに女性職員が見守りに付いた時には、ズボンを下し下半身を見せる行為も出現した。

これらの問題行動に対応する中で、Aさんが職員の反応を伺い、対応する態度や動きも含め楽しいと感じていると推察された。そこで、職員は本人とは視線を合わさず、黙って淡々と関わることにした(クールで淡々とした対応)。また、関わりを求める方法が唾飛ばしといった行為ではなく、他の方法で伝えることはできないか?と考えた。職員を呼ぶときに両手を叩く場面が見られることがあったため、唾を飛ばすのではなく、両手を叩いて職員と関わられるよう取り組んだが、唾飛ばしが返ってくる有り様だった。

(2) 問題行動への検討

<姫路市立発達医療センターリハビリテーション部門の作業療法士(以下、OT)の評価>

本人の問題となる行為について相談し、OTが実際に本人の様子を確認して行動の評価を行った。唾を飛ばす、ズボンを下すといった行為は注意引き行為であり、リアク

ションをしてしまうことでそれが本人にとって報酬となり、どんどん強化されてしまっている状況であるとの評価であった。OTからは今取り組んでいる対応（クールで淡々とした対応）を続けていながら様子を観察していく方法でよいとのアドバイスがあった。また、“インパクトのある状況”が好きであり、このことが“人にちょっかいを出す”という行動パターンになっているため、違う方向に向ける工夫をしていくことや少しでも集中できるものに取り組めることを考えていくよう助言を得た。

<併用利用しているB事業所との共有>

Aさんは書写デイだけでなく、火曜日と水曜日はB事業所を併用利用している。そちらでも同様の行為が見られているため、定期的にサービス担当者会議でお互いの状況や対応について情報交換を行った。必要に応じて書写デイでの活動や食事の様子を相談支援専門員とB事業所職員が視察し、対応方法だけでなく周囲との距離感や環境設定について共有し、共通した対応を行うようにした。

<事例検討会での検討>

ルネス花北成人部（以下、成人部）では、年間3回全事業所の代表職員が参加して困難事例の事例検討会を実施している。令和4年6月の事例検討会でAさんの事例を提供し、参加職員より幅広い視点からの対応アイデアの提案を受け、唾飛ばし行為の軽減に向けて検討を行った。参加者からのアイデアの中から以下の3点について書写デイで取り組むことにした。

- ①唾飛ばしのあと一緒に唾を拭き、一緒にできたことを評価し、適切な行動を強化していく。
- ②唾を飛ばすことで発散できるなら、吐いても良い環境設定を行う（外に向けて唾をばく、バケツを持つ、など）とともに本人が

主体となってアクティブに楽しめる活動を見つけていく。

- ③マンツーマン対応していることが逆に本人が面白がることに繋がっているのではないか？本人から離れて見守る時間を設け、その時間を増やすことができるかどうか確認する。

3 取り組みについての考察

OTの評価、助言を受け、B事業所とも連携しながらAさんが好きな活動、感覚、映像などに興味を向けられるよう対応を行ったが、唾を拭き取る動きも本人にとって楽しいようで、なかなか唾飛ばしやズボン下ろしが軽減する有効な対応は見つからなかった。また、事例検討会でのアイデア3点についても実際に取り組み検証した。

①について

唾を飛ばした後、一緒に拭いてみた。今まで拭いたことがなかったAさんは拒否が強く抵抗も見られた。それでも動作を見てもらいながら一緒に繰り返して取り組んでみたが、唾液を拭き取るというよりは床の上を撫でているだけで、プラスの評価を行うも軽減には繋がらなかった。

②について

当時はコロナ禍で唾を飛ばしてもいい環境を設けることはできなかった。しかしAさんが活動の中で何に興味を示しているのか、こういったときに楽しんでいるのかについて観察してみると、ボーリングでピンが弾ける時の音や缶積みで缶が倒れる時の音など、にぎやかな音が好きであったり、紙をちぎったり丸めるときの音や感触を好むことがわかった。そこで活動の時間以外にはタブレットを使って好きな音の動画を観てもらったり紙を渡してみたが、すぐ飽きてしまい唾飛ばしは減らなかった。

③について

本人から離れるにあたり、Aさんのポジ

ションを考えた。Aさんはカーペット上でラッサルクッションに横になり腕で頭を支える姿勢をとった(図1)。その姿勢でいる時はリラックスでき、座位の時よりも唾飛ばし行為が少ないと予測した。Aさんは周りを見回していたが、あえて視線をそらして見守った。気を引こうと唾飛ばし行為もあったが、職員は必要以上には反応せずに視線も合わせず淡々と拭き取りを行った。これまでと違う対応にAさんも唾飛ばしだけではなく、手を叩いたり声を発して職員を呼ぶ場面がしばらく見られたが、職員からのリアクションがなくなったことで唾飛ばしや手を伸ばすことが減少した。

以上のことから③のアイデアに効果が見られ、この対応を継続することで注意引き行為は職員が横にいてもほとんど見られなくなった。



図1

4 本人らしく楽しめる支援

注意引き行為が落ち着き、ラッサルクッションで過ごすことが多くなったAさんだが、落ち着いているからと距離を取り、本人との関わりが減ったことで頻繁に笑う本人らしさ(図2)が消え失せていったのも拒めない。そのため次の段階として活動中は上記でも述べたAさんが興味のあるものを取り入れながら集中して活動に取り組んだり楽しめるようマンツーマン対応でアプローチを行った。職員と適切に関わっている時は、その都

度職員も笑顔でAさんとやり取りしている(図3)。Aさんは他にも、ウォータークッションの感触、紙を手に持ち左右に揺らす、紙を頭にのせる、シャボン玉が自分に向かって飛んでくるといった場面で笑顔で楽しそうな声を上げていた。賑やかな音楽で動きのある動画やアニメが始まるとスクリーンに注目し、笑いながら見入ることもあった。このような興味関心のあることを取り入れながら活動の幅を広げたり、みんなの輪に混じって取り組むことで本人らしく楽しみを共有できるよう今後も支援を続けていきたい。



図2



図3

【まとめ】

唾飛ばしに対応するためマンツーマン対応としたが、そのことが逆に気分の高揚に繋がりと、職員の注目を引きたくて行為が増幅されてしまった。また、職員が注意を行うことで余計に「注目してくれた」という捉え方に繋がりと、楽しみとなっていった事例を報告した。

関わってくれる相手の注意を引きたくて、“明らかにダメ”とされる行為を行ってしまう場合、反応する声や注意されること自体が人に関わってもらうための「手段」となってしまふ。その行為に至らないような環境や状況をつくれるように職員間で調整を行い、過度な反応はせずに統一した対応を行っていくとともに、プログラム活動や余暇時間など「楽しい」と思ってもらえる時間が増えるよう引き続き模索しながらより良い支援に繋げていきたい。

また、利用者の障害状況を踏まえ、本人の意思に寄り添いながら家族の負担を少しでも軽減し、住み慣れた地域でその人らしく生き生きとした生活が円滑に継続できるよう丁寧な相談対応を行い、個々の障害に向き合いながら必要な支援が行き届くことを書写デイの使命として今後も取り組んでいきたい。

※ 1 アンジェルマン症候群

主に神経系に影響する遺伝子疾患の一つであり、症状としては重度の精神発達の遅れ、てんかん、失調性運動障害、容易に引き起こされる笑いなどの行動異常、睡眠障害、低色素症、特徴的な顔貌（尖った下顎、大きな口）などを認める。

※ 2 ふぁ～すと・すてっぶ

ルネス花北成人部の各施設と姫路特別支援学校・姫路しらさぎ特別支援学校・書写養護学校とが協働し、高等部1年生の夏休みを利用した施設体験（評価）を行う。

※ 3 安心安全に関する特別対応についての同意書

自傷、他害行為、突発的な行動等により、支援を工夫しても本人あるいは他者に危害を及ぼしてしまう事態において身体拘束の様態及び時間、緊急やむを得ない理由を記載し、利用者本人や家族に十分説明をし、同意を得

る書面。

[付記]

事例報告及び写真の使用については、御家族の承諾を得て掲載している。